



3.11東日本大震災・原発事故の体験 35 その2

被曝を覚悟で浪江町各地点の放射線量を測定

双葉郡浪江町(元浪江町職員・郡山市に避難中) 屋中茂夫さん(61歳・本会会員)

<No235 屋中さんの体験 その①の要旨>

私は双葉郡浪江町職員として教育委員会事務局で、あの震災発生時から小・中学生の避難の対応や学校再開などに追われました。

【放射線量の計測調査について】

夏場のタイベックスでの作業は過酷  
10キロ圏内の高放射線量危険地帯へ

私は、「学校再開が復興への第一歩である」という馬場町長の基本姿勢により、教育支援班と災害対策班の合同で、町内の学校施設を中心に17カ所の放射線量を調査。原発事故直後の平成23年6月17日から、毎週金曜日に町内に立ち入りし調査してきました。第一原発から約10キロ以内で、もちろん放射線量は大変高く、危険な地帯です。

タイベックス(防護服)とマスク、靴カバーを着用し、被ばく線量計測器を身に付け、シンチレーション式空間線量計を持参し、町内に入りました。全面マスクの内側は、呼吸でメガネが曇り視界不良。タイベックスは通気性が悪く、全身が汗でビッショリ。特に夏場の作業は過酷でした。食事も摂らずに帰庁することも度々ありました。

「毎時80μSv」の数字に気分が悪くなる

計測は、阿武隈山地の津島地区の津島支所から始まり、津島小学校、津島中学校、浪江高校津島

分校、赤宇木柵平地内へ。屋曾根地内の空間線量は、地上1mで毎時20~30マイクロシーベルト。大堀地区の小丸集会所前では地上1mで毎時30~50マイクロシーベルトを計測し、地上1cmでは毎時80マイクロシーベルトを計測。この数字を見ただけで気分が悪くなりました。

2011年9月8日  
『朝日新聞』  
写真中央が屋中さん



福島第一原発から約6kmの請戸小学校で、放射線量を測る浪江町職員=2日午後、福島県浪江町、河合博司撮影

「陶芸の杜おおほり」の駐車場でも、地上1mで毎時20~40マイクロシーベルトを計測しました。

私が想定する放射線の流れの方向は、双葉町の西、石熊から双葉バラ園、浪江町井手地区、大堀の陶芸の杜から小丸、国道114号線の大柿ダム上空から津島赤宇木地区、手七郎地内からさらに飯館村へと拡散していったものと思います。

【自分の健康管理について】

警戒・避難区域に31回の立入調査

放射能は五感で感じる事ができず、どれだけ浴びても熱や痛み等が伴わないので、被ばくの程度を自覚する事ができません。

私は被災後、生活が少し落ち着くと、自分自身の「外部被ばく・内部被ばく」が心配になり、ホールボディ検査を希望しました。

私の場合、平成23年度中に浪江町の警戒区域、計画的避難区域に一時立ち入りした回数は31回、滞在延べ時間は161時間にもなります。当然内部被ばくが心配なので、平成23年11月7日福島県平田村にある医療機関・ひらたクリニックでホールボディカウンター・WBCを受診しました。結果は、経過観察で3ヶ月後に再検査となりました。

・セシウム134は1.202ベクレル(今回の検査における検出限界は250ベクレル)

・セシウム137は1508ベクレル(今回の検査における検出限界は300ベクレル)

体内にある放射性物質から、概ね一生(成人では50年間)に受けると思われる線量の「預託実効線量」は0.26ミリシーベルトと推定されました。

平成24年度から浪江町津島診療所に、ホールボディカウンター・WBC検査機器が導入されたので、平成24年6月6日にそこで再検査したところ、

・セシウム134は177ベクレル(今回の検査における検出限界は180ベクレル)

・セシウム137は240ベクレル(今回の検査における検出限界は240ベクレル)

再検査で、体内にある放射性物質から、概ね一生(成人では50年間)に受けると思われる線量の「預託実効線量」は1ミリシーベルト未満と推定されました。

(裏面に続く)

戦争体験・震災体験をお寄せください!  
記録として残さないと、忘れてしまいます!  
忘れ去られてしまいます!

